

謝靈運詩注

森野繁夫

謝靈運は六朝・宋の人である。宋代には、東晉時代に盛行した玄言詩（老莊贊美の詩）が衰えて山水詩が盛んになるが、彼は当代の山水詩人の最高峰に位置する人物で、後世の詩人に大きな影響を与えた。その生涯は次の三つの時期にまとめることができる。

- 一、晋末の時期（四〇五〜四一九） 二一歳〜三五歳。
- 二、宋の武帝・少帝の時期（四二〇〜四二三） 三六歳〜三九歳。

永嘉太守の期間は、三八歳の七月から次の年の晩秋まで。

三、宋の文帝の時期（四二四〜四三三） 四〇歳〜四九歳。
この度は、第二期の作品、すなわち永嘉郡の太守に左遷された時期のものを取り上げた。

- 一、永初三年七月十六日之郡初発都一首

永初三年（四二二）七月十六日、永嘉太守に左遷された謝靈運が都を出発するにあたって思いを述べた詩である。「宋書」謝靈運伝には、左遷の事情について次のように記されている。

靈運、性は偏激にして、礼度を愆とがまること多し。朝廷は唯だ文義を以て之を処し、応実を以て相許さず。自ら謂へらく「才能は宜しく權要に參ずべし」と。既に知られざれば、常に憤憤を懐く。廬陵王義真、少くして文籍を好み、靈運と情款常に異なり。少帝 即位し、權は大臣に在り。靈運は異同を構扇し、執政を毀非す。司徒の徐羨之らは之を患へ、出だして永嘉太守と為す。

永初三年五月に武帝（劉裕）が薨じて少帝義符が立ち、六月に傅亮が中書監となり、司空の徐羨之、輔国將軍の謝晦とともに少帝を輔佐。靈運の左遷は、新政府ができてすぐに決められたようである。廬陵王義真を中心とした靈運一派の行動が、徐羨之らに如何に警戒されていたかがわかる。時に靈運は三十八歳であった。

- 一、永初三年七月十六日之郡初発都

永初三年七月十六日、郡に之かんとして初めて都を發す
述職期闕署 述職は 闕署を期せしに
理棹爰金素 棹を理むるは 金素に爰す

秋岸澄夕陰

秋岸 夕陰は澄み

火爰団朝露

火爰 朝露は団かなり

辛苦誰為情

辛苦しては 誰か情を為さん

遊子值類暮

遊子は 類暮に値へり

愛似莊念昔

似たるを愛するは 莊の昔を念ふがごとく

久敬曾存故

久しく敬するは 曾の故を存するがごとし

如何懷土心

如何せん 土を懷ふの心

持此謝遠度

此れを持ちて 遠度を謝す

李牧愧長袖

李牧は 長き袖に愧ぢ

郤克慙躡歩

郤克は 躡歩に慙づ

良時不見遺

良時にして 遺てられず

醜狀不成惡

醜狀も 惡まれず

曰余亦支離

曰に余も 亦た支離なれば

依方早有慕

方に依りて 早に慕ふ有り

生幸休明世

生まれて休明の世に幸せられ

親蒙英達顧

親しく英達の顧りみを蒙るも

空班趙氏璧

空しく班なる 趙氏の璧

徒乖魏王瓠

徒らに乖く 魏王の瓠

從來漸二紀

從り來りて 漸く二紀にして

始得傍婦路

始めて婦路に傍ふを得たり

將窮山海迹

將に山海の迹を窮め

永絶賞心悟

永く賞心の悟を絶たんとす

永初三年七月十六日、郡に行かんとして初めて都を出発する

任に赴くのは 夏の終わり頃と思っていたのに

舟棹をととのえた頃には もう秋になっていた

秋の川岸には 夕陰が澄みわたる

大火の星のもと 朝露が団かに結んでいる

この辛い思いに いったい誰が耐えられようか

まして此の旅人は 人生の夕暮れに当たっているものを

顔見知り似た者を喜ぶことは 莊子が昔を思うようであり

久しくしてよいよ敬意をはらうのは 曾子が馴染みを慕うよう

なもの

どうしたものか 住みなれた土地をなつかしむ此の気持ちを

此の気持ちを持ちながら 遠く旅に出る私が恥ずかしい

その昔 李牧は 長袖を着ることを愧じ

郤克は 舞の足運びに慙じたという

しかし良き時勢に遇ったので 棄てられることもなく

その醜さも 憎み嫌われることがなかった

いま私もまた 醜い姿を持っているために

此の世で生きてゆくにはと 早くから其のような時勢を慕って

いた

幸いにも良き御世に生まれあわせて

英達の人(庶陵王)の愛顧を受けた

だが「趙氏の璧」として 空しく列なっているだけで

「魏王の瓠」のように 徒らに期待に背いてしまった

かくして今や二十年もたつて

始めて帰隱の道に近づくことができたのだ

これからはひとり 山海の迹を窮めることになり
賞心の友との楽しみ語らいは永遠に絶たれることにならう

1、述職期闋暑、理棹變金素、

〔述職〕昔は、諸侯は五年に一度、天子に朝見して、その職の実状を報告した。(『尚書大伝』卷二下)。ここは天子の命によって、そのような職に就くことを意味している。『漢書』王吉伝に「昔召公述職、当民事時、舍於棠下而聽斷焉」(昔、召公 職を述べ、民事に当りし時、棠下に舍みて聽斷す)とある。

〔闋暑〕夏の終わり。「闋」は、尽きる。晋・潘岳「悼亡詩」に「溽暑隨節闋」(溽暑 節に随ひて闋く)とある。

〔理棹〕舟の棹を整える。出発の準備を整えること。

〔金素〕秋のこと。秋は五行で金にあたり、色は白なので、このようにいう。

2、秋岸澄夕陰、火旻團朝露、

〔夕陰〕 晚景。

〔火旻〕「火」は、大火の星。「毛詩」豳風・七月に「七月流火、九月授衣」(七月 流火あり、九月 衣を授く)とある。

〔旻〕は秋の空。「爾雅」釈天に「秋を為旻天」(秋を旻天と為す)とある。

〔團朝露〕「毛詩」鄭風・野有蔓草に「野有蔓草、零露漙漙」(野に蔓草有り、零つる露は漙漙)とある。「漙」は「團」に同じ。李善注に引く「詩」では「團」に作る。齊・魯・韓の所謂る「三家詩」では「團」字であったと思われる。

3、辛苦誰為情、遊子值頽暮、

〔辛苦誰為情〕晋・陸機「赴洛詩」の「惜無懷婦志、辛苦誰為心」(惜しむらくは婦を懷ふ志の無きこと、辛苦しては誰か心を為さん)を踏まえる。

〔遊子〕旅人。ここは自分のこと。

〔頽暮〕老年。『楚辭』九章・悲回風に「歲習習其若頽」(歳習習として其れ頽るるが若し)とある。

4、愛似狂念昔、久敬曾存故、

*李善注に「言うところは、遊子は悲しみ多く、物に触れては恋しさを増す。其の似たる者を愛することは、莊生の騁昔を念ふが若く、久しくして愈いよ敬することは、曾子の故交を存するに類す」という。旅人には故郷のことが、なかなか忘れられないことを言う。

〔愛似狂念昔〕「莊子」徐無鬼に「夫れ越の流人は、国を去ると旬月、皆て国中にて見し所を見て喜ぶ。期年に及ぶや、人に似たる者を見て喜ぶ」とある。李善は、此の「莊子」の文を踏まえたとするが、五臣(呂向)注は「莊子(文)は越人なり。楚に事へて執珪となるも、疾有りて越吟を為す」(『史記』陳軫伝)と、莊子越吟の話に依つたものとする。

〔久敬曾存故〕「久敬」については、『論語』公冶長に「晏平仲、善与人交、久而敬之」(晏平仲は、善く人と交はり、久しくして之を敬す)とある。「曾存故」については、『韓詩外伝』卷九の「曾子曰、有三費。少而学、長而忘之。一費也。事君有功、輕而負之。二費也。久交友而中絶、此三費也」(曾子曰く、三費

有り。少くして学び、長じて之を忘る。一費なり。君に事へて功有り、軽しとして之に負く。二費なり。久しく友として交はるも、而も中ごろ絶つ、此れ三費なり)に依る。故交を永く続けるべきであると言う。そこには「久しくしていよいよ敬する意も込められている。この句については呂向注は「曾子は太山の下に耕し、雨に遇ひて憂思の歌を作る」と、別の典拠を引いているが、それは「曾存故」三字だけに関係する故事である。

5、如何懐土心、持此謝遠度、

*李善注には「此れ土を懐ふを謂ふなり。言ふところは、如何ぞ彼の懐土の心に同じき。これを持って、弥よ遠度を慙づ」。つまり、莊・曾と同じように私も懐土の心を強く持ち続けており、それゆえに、その心とはうらはらに遠く旅立とうとしている私を、恥ずかしく思う、という意味であろう。しかし五臣(呂延濟)注には「此の懐土の心を持ちて、古人の遠度に慙謝す」と、「遠度」を、李善が「遠い旅に出ること」と解しているのに対して「古人(莊子・曾子)の深い思い」と解している。つまり呂延濟は「自分の懐土の心の深さが、古人のそれに及ばないことを慙じ」と解釈する。

「懐土心」知己・友人との交わりの深かった此の地、つまり都。

一説に、故郷を懐う心。そうであれば「都の友を思いながら、しかし一方、どうしたことか郷里を懐かしむ思いに引かれている。莊子・曾子の態度に比べれば慙ずかしいかぎりだ」という意味になる。

「遠度」遠くへ旅をすること。李善注引「楚辞」遠遊に「遠度世

以忘歸」(遠く世を度りて以て帰るを忘れんとす)とある。今本は「遠」を「欲」に作る。また後漢・張衡「思玄賦」に「願得遠度以自娛」(願はくは遠く度りて以て自ら娛しむを得ん)とある。五臣注は、「古人の遠度」と解する。

6、李牧愧長袖、卻克慙躡歩、

*李善注に「手足に疾有れば、故に或いは愧ぢ或いは慙づるを言う」と説明する。

「李牧愧長袖」戦国・趙の將軍であった李牧は手が短かったために何時もそれを気にしていたという。「戦国策」秦策五に見える。

「卻克慙躡歩」春秋・晋の大夫であった卻克は足が不自由であり、そのことを何時も気にしていたという。「春秋左氏伝」宣公十七年に見える。「躡歩」は、舞における足の運び。左思「魏都賦」に「邯鄲躡歩」(邯鄲の躡歩)とある。

7、良時不見遺、醜状不成惡、

*李善注に「疾有り」と雖も、皆な棄遺されざるを言うなり」と説明する。

「良時」後漢・弥衡の書に「衡以良時、散而復合」(衡は良時を以て、散じて復た合す)とある。また潘岳「河陽臯作」に「徒恨良時泰、小人道遂消」(徒らに恨む 良時の泰らかにして、小人道は遂に消えぬるを)とある。

8、曰余亦支離、依方早有慕、

「支離」支子(支離)人間世篇に「支離なる者は、頤は臍を隠し、肩は頂よりも高く、会撮は天を指し、五管は上に在り、両脾は脇

となる」とあり、李注に引く「七賢音義」に「形体の離れて全正ならざるなり。疏と名づく」という。「手の短かった李牧、足の不自由だった卻克、それにもまして私は」という。靈運の場合、身体的なものではなく、政界を渡ってゆく才能についていうのである。五臣(劉良)注には「支離とは、毀瘁なり」と、瘦せ衰えることと解している。

「依方早有慕」「依方」は、方外(此の世界の外)ではなくて、此の世の常の道に依ること。「莊子」大宗師篇の「子桑戶死す。

孔子曰く、彼は方外に遊ぶ者なり。而して丘は方内に遊ぶ者なり」と。子曰く、夫子は何の方にか依ると。曰く、丘は天の戮人なり」とあり、司馬彪注に「方は常なり。彼は心を常の教えの外に遊ばすを言うなり」という。なお「支離」を「毀瘁なり」と解する五臣(劉良)注は、「方」を「道なり」として「言ふところは我が形も亦た復た毀瘁するなり。今將に常の道に依りて、形を養ふを慕ふ有らんとす」と言うが、もうひとつ、よくわからな

い。「早有慕」とは、李牧や卻克が「良時に逢って用いられ、醜状も悪し」とされなかつたような状態を、「早に慕っていた」というのであろう。

9、生幸休明世、親蒙英達顧、

「休明世」盛明の世。宣公三年の「左氏伝」に「王孫滿曰、徳之休明、雖小重也」(徳の休明なる、小と雖も重きなり)とある。

「英達」英達の人。ここは廬陵王を指す。

10、空班趙氏璧、徒乖魏王瓠、

*李善注に「言ふところは珍とさるることは趙璧と同じきも、用を為すや魏瓠に乖くなり。施す所無きを言うなり」とある。

「空班」「班」は、順次に並ぶこと。それだけの価値も無いのに、価値の有るもの、すなわち「趙氏の璧」と同じように並んでいるだけであった。

「趙氏璧」天下の名璧、「和氏の璧」のこと。蔡邕「琴操」に「楚の明光は、楚王の大夫なり。昭王、和氏の璧を得、以て趙王に貢せんと欲す。是に於て明光を遣し、璧を奉じて趙に之かしむ」とある。

「魏王瓠」「莊子」逍遙遊篇に見える話。恵子は魏王にもらった大瓠の種をまいて、やがて大瓠を收穫した。そうして、あれやこれや用いてみたが、結局、利用の方法がわからずに棄ててしまったという。それを恵子から聞かされた莊子が、「夫子は固に大を用ふるに拙なり。何ぞ以て大樽と為して、江湖に浮かぶことを慮らざる」と言つたという。

「徒乖」とは、「魏王の瓠」のように、大用に役に立つたらうと期待されながら、期待はずれに終わってしまうこと。したがって「徒らに魏王の瓠に乖く」とは、大用を果たす人材とはならなかつた、という意味にならう。せっかくの「魏王の瓠」を使いこなすことができなかつた、という意味にも解釈できるが、それであれば廬陵王を非難することになつてしまうから、それは靈運の意図するところではあるまい。

11、從來漸二紀、始得傍婦路、

「從來漸二紀」「從來」とは、仕官して以来。「紀」は十二年の

こと。そうすると二十四年前、つまり十四歳で仕官してから、ということになり、不自然である。「二紀」とは二十年のことなのか、それとも「従来」とは都に出てきてからということなのであろうか。おそらく大まかな数を示したかと思う。なお五臣（張鏡）注は「仕え来たりて自従り、漸く進みて二十四年を得たり」という。次の「過始寧墅」詩にも同じ表現がある。

「傍婦路」李善は「郡に之かんと欲すれば、必ず塗は始寧を経る。故に婦路と曰ふ」と注している。

12、将窮山海迹、永絶賞心悟、

「将窮山海迹」これからは独り永嘉の山海の迹を窮め、そうしてやがては帰隱することになろう。

「永絶賞心悟」「悟」は、対の意。対いあって語ること。五臣本は「晤」に作る。「賞心」は、都の廬陵王らを指す。再び共に語りあうことのできない悲しみを詠う。「従弟の恵連に酬うる詩」

に「永絶賞心望、長懷莫与同」（永く賞心の望みを絶ち、長く懷ふも与に同じくする莫し）と、同じ表現がある。謝靈運は、永嘉太守の任期が終わったら始寧に帰り、そこに隱棲するつもりであった。「永絶賞心悟」とは、彼のそのような思いに基づく言葉である。

二、過始寧墅一首

永初三年（四二三）に永嘉太守に任ぜられた謝靈運は、任地へ向かう途中、始寧の別墅に立ち寄った。始寧は、今の浙江省始寧

県。此の詩は其のときの作である。「宋書」本伝には始寧墅について、

靈運の父祖は、並びに始寧県に葬られ、並びに故宅および墅有り。遂に籍を会稽に移し、別業を修習し、山に傍ひ江を帯び、幽居の美を尽くす。

のように記す。

過始寧墅

始寧の墅に過ぎる

東髮懷耿介 髮を束ねてより 耿介を懐くも

逐物遂推遷 物を逐ひて 遂に推し遷る

違志似如昨 志に違ふこと 昨の如きに似たるも

二紀及茲年 二紀にして茲の年に及ぶ

潘磷謝清曠 潘磷して 清曠に謝し

疲爾慙貞堅 疲爾して 貞堅に慙づ

拙疾相倚薄 拙と疾と 相い倚り薄り

還得静者便 還つて静者の便を得たり

剖竹守滄海 竹を剖きて 滄海に守となり

枉帆過旧山 帆を枉げて 旧山に過ぎる

山行窮登頓 山行きしては 登り頓りを窮め

水涉尽洄沿 水涉りしては 洄り沿りを尽くす

巖峭嶺稠疊 巖は峭しくして 嶺は稠疊たり

洲蔡渚連綿 洲は蔡りて 渚は連綿たり

白雲抱幽石 白雲は 幽石を抱き

緑篠媚清漣 緑の篠は 清漣に媚ぶ

「葺宇臨迴江 宇を葺いて 廻れる江に臨み
築觀基曾巖 觀を築いて 曾き巖に基す
揮手告郷曲 手を揮りて 郷曲に告げ
三載期掃旋 三載にして 掃旋を期す
且為樹粉檟 且く為に 粉檟を樹えよ
無令孤願言 願ひに 孤かしむること無かれ

始寧の別墅に立ち寄って

髪を束た幼い頃から 独り節義を守ろうとしていたが
世事を遂うことになり 遂に願ひとは異なつてしまつた
志に背いたのは 昨日のことのようであるが
既に二十年たつて 此の年になつてしまつた
黒くなり薄くなつて 清曠なる人に恥ずかしく
世事に疲れきつてしまひ 貞堅なる人たちに慙ずかしい
しかし 拙なさと病いとが 相い寄り合つて
かえつて 「静かなる者」となる便を得ることができたのだ
此の度は竹符を削ぎ与えられて 滄海のほとりの太守となり
舟路を曲げて 故郷に立ち寄つた
山に登つては 登り下りを窮め
水を渡つては 流れに従つたり 遇つたりした
巖は切り立ち 嶺は重なりあり
中洲はめぐり 渚はどこまでも続いている
白雲は 山奥の岩を抱くように湧いており
緑の篠は 清らかな 漣に媚びるように揺れている

めぐる流れを前にして 家を作り
高い山の上に 樓觀を築いた
手を振つて別れるとき 郷里の人たちに告げ
三年たつたら 必ず歸つてこようと心に期す
ともかく 楸と楸を植えておいてくれ
私の思いに背くようなことは させないでほしい

1、束髮懷耿介、逐物遂推選、

「束髮」李善注は「韓詩外伝」卷七の「人の父たる者は、必ず其の身体を全くし、其の束髮に及びては、屈して明師に授けて、以て其の材を成す」を引く。学問を始める年ころ、すなわち十数歳をいう。五臣（張銑）注は「束髮は、入仕を謂う」という。

「耿介」自分の節義を固く守ること。「楚辭」九弁に「独耿介而不随兮、願慕先聖之遺教」（独り耿介にして随はず、願はくは先聖の遺教を慕はん）とある。王逸注に「節を執り度を守りて、枉り傾かざるなり」と説く。束髮の頃に、そのような志を懷いたのだという。

「逐物遂推選」「逐物」は、世事を遂う、つまり官職に就くこと。「莊子」天下篇に「惜乎、恵施之才、駘蕩而不得、逐万物而不反」（惜しいかな、恵施の才にして、駘蕩して得ず、万物を逐いて反らざること）とある。恵施が万物に心を馳せて、眞の道を追及しなかつたことをいう。また「尚書」君陳篇に「惟民生厚、因物有遷」（惟れ民の生は厚ければ、物に因りて遷る有り）とある。人間の性は、物にひかれて遷りかわり易いものであることを

いう。つまり靈運は二つの典故を踏まえて、自分の弱い心と、求めるべきものを求めずに誤った方向に進んでしまったことを、述べている。

2、違志似如昨、二紀及茲年、

「違志」「耿介」の志を遂げることができず、「物を遂いで遂に推選し」てしまったことを言う。

「二紀」「永初三年七月十六日之郡初発都」詩にも「從來漸漸漸く二紀、始めて帰路に傍うを得たり」と言う。二十年、または二十四年。都で学問を始めた十数歳から数えると二十四年、仕官してからすると二十年になる。

「茲年」此の年。楊雄「解難」に「歴覽者茲年矣」（歴覽することと茲年なり）とある。

3、潘磷謝清曠、疲齒慙貞堅、

「潘磷」白いものが黒くなり、厚かったものが薄くなる。つまり志が外物に負けて変化することを言う。「論語」陽貨篇の「子曰、不曰堅乎、磨而不磷。不曰白乎、涅而不緇」（子曰く、堅しと曰はざらんや、磨すれども磷がず。白しと曰はざらんや、涅すれども緇まず）とあるのにもとづき、逆の意味に使っている。

「清曠」清らかで世俗を問題にしない志。また、そのような志を持つている人。「山居賦」に「謝平生於知遊、棲清曠於山川」（平生を知遊に謝し、清曠を山川に棲ましむ）とあるのは、謝靈運の志をいう。

「疲齒」世事に疲れきってしまう。「莊子」齊物論に「齟然疲役、而不知其所歸。可不哀邪」（齟然として役に疲れ、而して其

の帰する所を知らず。哀しまざる可けんや）に基づく語であり、「疲齒」二字で、「莊子」の次の句の「而不知其所歸」という意味まで含ませている。

「貞堅」濁乱の世にあっても其の堅白なる志を変えない人たちを指す。

4、拙疾相倚薄、還得静者便、

*「文選」六臣本校語に「五臣本、無此二句」という。五臣本（崇本）には此の二句は無い。しかし、この二句についての李善注はあるから、李善が施注に用いたテキストには確かにあった。

「拙疾」官界の渡り方の拙さと、病氣。潘岳「閑居賦」に「巧誠有之、拙亦宜然」（巧みなるは誠に之有り、拙なるも亦た宜しく然るべし）とある。官界を巧みに渡ってゆく人は確かにいる。したがって其の反対である拙なる者も確かに存在するはずだ。つまりそれは自分である。と潘岳は言っているのである。

「倚薄」（拙と疾とが）倚りあい付きあっている。「薄」は、相い付く意。

「還得静者便」「静者」は、「論語」雍也篇の「子曰、知者楽水、仁者乐山。知者動、仁者静」（子曰く、知者は水を樂しみ、仁者は山を樂しむ。知者は動き、仁者は静かなり）による。「拙と疾のゆえに、かえって、静かなる者となる便利を得ることができた」という意味。

5、剖竹守滄海、枉帆過旧山、

「剖竹」郡守に任じられること。竹符を二つに剖いて、その一つを太守の証として与えられる。

「枉帆」舟の進路を曲げる。永嘉郡への進路を始寧の方へ曲げた。

「旧山」故郷のこと。ここは始寧を指す。

6、山行窮登頓、水涉尽洄沿、

「山行窮登頓」始寧の山を、存分に登ったり下ったりした。

「水涉尽洄沿」始寧の川を、遡ったり、流れに従ってくだったり、心ゆくまで楽しんだ。「爾雅」积水に「逆流而上、曰洄沿」

（流れに逆ひて上るを、洄沿と曰ふ）とあり、また孔安国「尚書伝」（「禹貢」伝）に「順流而下、曰沿」（流れに順ひて下るを、沿と曰ふ）という。

7、巖峭嶺稠疊、洲繁渚連綿、

「巖峭」【広雅】釈詁に「峭、高也」とある。巖が高く切り立っている。

「嶺稠疊」【稠】は、密、衆の意。嶺は重なりあっている。

「渚連綿」渚は、ながながと続いている。

8、白雲抱幽石、綠篠媚清漣、

「白雲抱幽石」上の「巖峭嶺稠疊」句に関連する句。白雲が幽石を抱き抱えるように湧いている様子を擬人的に詠んだ。

「綠篠媚清漣」上の「洲繁渚連綿」句に関連する句。「清漣」は

【毛詩】魏風・伐檀の「河水清且漣漪」（河水は清く且つ漣漪なり）にもとづく語。清らかなさざ波。緑の篠の葉が清らかな漣に浸ったり離れたりしている様子を、「媚びる」と、これも擬人的に詠んだ。

9、葺宇臨迴江、築觀基曾嶺、

「葺宇」のきを葺く。つまり、家を構えること。

「臨迴江」【迴江】は、漢・王褒「洞簫賦」に「迴江流川、而漑其山」（迴江 流川ありて、其の山に漑く）とある。巡り流れる江。その江に臨んで家を構えた。

「築觀基曾嶺」樓觀を、高い山の頂きに築いた。

10、揮手告鄉曲、三載期婦旋、

「揮手」別れの手を振る。晋・劉琨「扶風の歌」に「揮手長相謝、哽咽不能言」（手を揮りて長く相い謝し、哽咽して言ふ能はず）とある。

「鄉曲」郷里の人。「蒸丹子」に「夏扶曰、土無鄉曲之譽、則未

与論行」（夏扶曰く、土に郷曲の譽無ければ、則ち未だ与に行ひを論ぜず）とある。

「三載」太守の任期である三年間。「尚書」舜典に「三載考績、

三考黜陟幽明」とある。つまり、官吏は三年たてば成績が出るので、更に九年間その成績を見たうえで、能力のある者は昇進させ、そうでない者は黜退する、ということである。

11、且為樹粉○、無令孤願言、

「樹粉檜」ニレとヒサギを植える。「左氏伝」襄公四年に「初季孫為己樹六檜於蒲圃東門之外」（初め季孫は己の為に六檜を蒲圃の東門の外に樹う）とあり、杜預の注に「蒲圃とは、場圃の名。

李文字は檜を樹え、自ら檜と為さんと欲するなり」という。

「孤願言」私の思い。「毛詩」衛風・伯兮に「願言思伯」（願いて伯を思ふ）とあって、鄭箋に「願は念なり」という。「言」は助字。しかし五臣（呂向）注は「我が所願の言に孤かしまる無か

れ」と、言葉と解している。

以上の謝靈運詩二首は、平成元年度・大学院の演習における成果の一部である。いずれも『文選』巻二六に収められている作品であり、李善注および五臣（張銑・呂延濟・呂向・劉良・李周翰）注を参考にして、語句の意味や踏まえられている典故について調べ、検討を加え、その結果を詩注と口語訳にまとめたものである。

調査と検討の内容は、

*古くから使われている詩語を、謝靈運はそのままの意味で使用しているのか、それとも自分なりの使い方をしているのか。

*靈運が新しく作った語、例えば「賞心」には、どのような意味が込められているのか。

*踏まえている典故は、原典のままの意味で使われているのか、それとも靈運なりの新味が加えられているのか。

などについてであり、それらの結果を踏まえて、靈運の思いに限り無く迫ってゆこうとした。

担当者が調べてきた内容については、皆で其の是非・当否について討議するわけであるが、最後の判断は指導教官がしなければならぬ。しかし、判断のつきかねる場合も多く、その様子は右の詩注に示されている如くである。もうすこし自信を以て判断を下すことはできないか。我が非才を嘆きつつも、尚お精進を続けなければならぬ所以である。